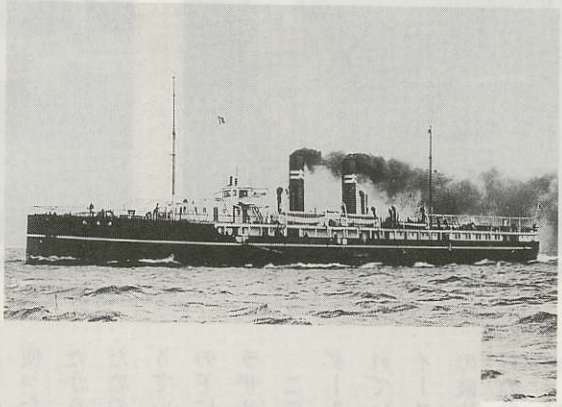
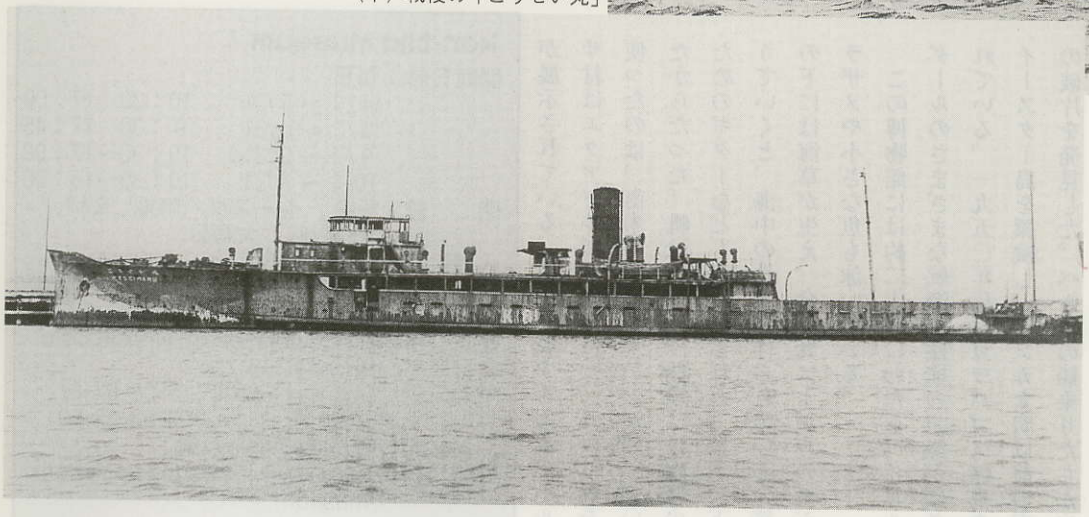
こうせい丸

《主要目》貨客船、東京湾汽船所属、1,026総トン、1,539重量トン、主機三連成汽機1基、出力1,900馬力、最高速力12ノット、旅客定員549名、1915年英国D＆Wヘンダーソン社建造、前名屋島丸

英国軍艦から大変身した異色の内航客船



（上）「屋島丸」時代の姿
（下）戦後の「こうせい丸」



カムフラージュの白波を描く

迷彩（カムフラージュ）とは、まぎらわしい塗装を施して敵の眼をあざむくことだ。

その歴史は古く、船では古代の地中海にさかのぼるとされるが、広く用いられるようになったのは第一次大戦からである。

ドイツのUボートの攻撃から艦船を守るのが主目的だった。潜望鏡による発見を困難にしたり、船の針路、速力、距離を誤測させるため、さまざまな色を組み合わせて眩惑させるダズルペインティングなども登場した。

なかでも奇抜なのは、船首の水線部分に大きな白波を描いて、速力を誤認させようとした塗装だ。現代感覚では考えられないような漫画的な着想だが、当時の潜望鏡の視認精度は、その程度のものだったのだろう。

日本では、太平洋戦争中にこれを施した実例がある。上の写真をご覧いただきたい。

特設駆潜艇として活躍した東京湾汽船（いまの東海汽船）の「こうせい丸」。戦後、層鉄寸前の状態で東京港晴海に係留中の姿である。船体は汚れ、さびが流れて見るかげもないが、船首の水線部のあたりに白ペンキでカムフラージュの白波を描いたあとがある。

特設駆潜艇「こうせい丸」は、浦賀を基地に東京湾の防衛にあたったという。米潜水艦

を見張るのが仕事だが、このような白波塗装が、実戦で有効だったのだろうか。

戦争末期には特設敷設艇になり、本土決戦に備えて機雷をばらまく任務にもついた。

英国海軍のスループ艦として誕生

「こうせい丸」の前身は、大阪商船の瀬戸内海航路客船「屋島丸」である。その異色の船歴についてはすでに、福井静夫氏、山高五郎氏らによる記述があるので、ここでは、その後明らかにされた史実によって、これらを補足修正することにしたい。

新造時は「サンフラワー」といった。

第一次大戦中に英国海軍が量産したスループ艦の一隻である。このタイプは、掃海とUボートからの船団護衛が仕事だった。誕生したときから対潜作戦に縁があったわけだ。

大戦後、商船「ランビヤ」としてビルマ、インド方面で働いていたが、一九二三（大正十二）年に大阪商船に身売りし、大阪の藤永田造船所で内航客船に改造された。改造設計にあたったのは和辻春樹工学博士である。

「船体の寸法その他いろいろの条件が、商船に良いようにはできていないのだから、非常にやりにくかった」

と、博士は随筆『船の思い出』の「屋島丸」の項で述べている。

「屋島丸台風」で沈む

内航客船「屋島丸」に生まれ変わったこの二本煙突の船は、大阪商船のドル箱航路である阪神～別府航路などに就航した。

ところが、十年後の一九三三（昭和八）年十月、日本の海難史に残る大事故を起こし、同船はその生涯を閉じたかにみえた。別府からの帰航便で、のちに「屋島丸台風」と名付けられた台風に遭遇し、須磨沖で沈没、七十人近い死者を出したのだ。新聞は号外を出して、この惨事を報じた。

そして、海底にあること七年。太平洋戦争の前年に引き揚げられ、再び藤永田造船所で復活工事を受けた。ボイラーは換装され、一本煙突になった。船体も純白に化粧され、船名は「こうせい丸」に変わった。

日中戦争の拡大で、船が足りない時代だった。規制強化で燃料油もなかったから、この船の石炭焚きスチーム主機も魅力だったにちがいない。海底の廃船を引き揚げて蘇生させた背景には、こうした社会事情があった。

「こうせい」には「更生」の意味が込められていたのではないか。

さびの厚みで浮いていた

東京湾汽船がこの再生船を買いとった。

そして開戦の年の夏から、東京～伊豆大島～下田航路に投入した。徴用や海難で定期船が不足していたうえ、ディーゼル船が多かったので、スチーム船が欲しかったのだ。

だが、就航期間は短かった。海軍に徴用され、前述の特設駆潜艇になったからである。英国海軍のスループ艦出身の同船としては、「昔とったきねづか」の仕事だった。

が、なにせ七年間も沈んでいた船である。主機と船体のいたみは想像をこえていた。

「五～六ノットしか出なかった」

と、三菱横浜でこの船の修理にたずさわった狩野洋太郎氏（もと石川島播磨重工専務）は筆者に語っている。こんな鈍速では、船首に白波を描きたくなるわけだ。

「さびを落とそうとしたら、航海長がすっとんで来た。さびの厚みで浮いているような船だから、やめてくれとのことだった」

ウソのような本当の話である。

終戦は横須賀で迎えた。米軍機のはげしい空襲のもと、よく生き残ったものだ。

戦後はおもに貨物輸送に従事していたが、数年後、東京港に係船となっている。

一九五〇（昭和二十五）年に、この風変わりな内航客船は解体処分のため、「低性能船舶買入法」により国に売却された。

山田　廸生